



ネットワーク情報学部長 飯田周作 教授

体験による学びを 加速させる

生田 10 号館にて

いいだ しゅうさく

北陸先端科学技術大学院大学博士後期課程修了。博士（情報科学）。SRI International Visiting Scholar (2007)。University of Illinois Urbana-Champaign Visiting Scholar (2007-2008)。専門はソフトウェア工学。著作に「UML 動的モデルによる組み込み開発」（共著 第7章 オーム社 2003年）、「Document Logic: Risk Analysis of Business Processes Through Document Authenticity」（Journal of Research and Practice in Information Technology, Australian Computer Society 2011年）など。

2021年9月よりネットワーク情報学部長に就任いたしました飯田です。育友会員の皆さまにご挨拶を申し上げたく寄稿させていただきました。

私は1994年に専修大学経営学部を卒業し、その後、教員として戻ってまいりました。思い出の深い生田キャンパスで仕事ができることは無上の喜びです。今現在、世界は新型コロナウイルス感染症の流行や戦争などで混乱の時代を迎えていますが、学生さんたちの貴重な時間を輝かしい体験にすることができるよう精一杯の努力をしていく所存です。

ネットワーク情報学部は体験による学修を重視しています。これは学部創立からの考え方であり、私の思いも全く変わりません。体験によって学ぶということは、何かに参画すること、あるいは何かにチャレンジすることと言い換えてもよからうと思います。誰かに与えられたこと、お膳立てをされたことをこなすだけでは薄っぺらな体験しか得ることができません。何かにチャレンジするためには、いくつかの心の準備が必要になります。目標を持つこと、失敗を恐れない勇気、好奇心、協働する柔軟性などです。教員の役割は、これらの心の準備を後押しし

て、必要な知識・技術を適切に指導するコーチです。ネットワーク情報学部では、学生さんたちの知的好奇心を刺激し、それを議論によって増幅し、グループワークによって達成していく仕組み作りに日々努力をしているところです。

専修大学での思い出

私自身の学生時代を振り返りますと、大学にさまざまなチャレンジの機会をもらったことが思い出されます。ちょうど1990年くらいのことです。まだ日本ではインターネットという言葉はあまり知られていない時代で、少数の大学間でようやくインターネットへの接続が始まりつつあるという状況でした。そのような状況下で、専修大学としては他大学に先駆けてインターネットに接続することを決めました。当時からコンピュータ教育に力を入れていた専修大学において、このことは特筆すべき判断であったと思います。その際に、私は学生ではありませんでしたが、先生方や情報科学センターの職員の方たちと共に他大学との会議に出席したり、学内のシステム構築のお手伝いをさせていただいたりと貴重な経

験をさせていただきました。その頃はまだ教育にメインフレーム（汎用機）と呼ばれる大型コンピュータが使われている時で、私はそのメインフレームの隣で毎日夜遅くまでゴソゴソやっているというような生活を送っていました。時々、職員の方に出前を取っていただいていたのが良い思い出です。この時は、大変だったという感覚は全くなく、ただ楽しくて夢中で取り組んでいただけでした。この体験が、私の研究者としての原点であったらうと今になって思っています。

大学時代はそのようなことで自分の興味と勉強がぴったり合い、楽しい思い出が多いです。私はその日に大学であったことを親に話すことが多く、今日は〇〇先生の研究室でこんなことをしたとか、〇〇先生とテニスをしたとか、そんな話をよくしていました。私の両親は勉強に関しては全く口を出さないタイプなのですが、あるとき半ば呆れ顔で「先生とばかり遊んでいないで他の友達とも遊んだらどうなの」と言ったことがあります。遊んでいるわけではないのだと反論しようとして、「いや、やはり遊んでいるのかもしれない」と思ったことがあります。このような気持ちを持つことができたのは、当時の先生方のおかげだと感謝しています。もし、今の学生さんたちが「勉強が辛い」とか「やらされている」というような気持ちを持つことがあるとすれば、それは我々教員に大きな責任があるのだと思います。興味や好奇心を育む工夫をしながら、学生さんたちと共に新しいことにチャレンジしたいと考えています。

思考と表現

私は専修大学を卒業した後に、他大学の大学院に進学しました。そこでは言語設計学講座という研究室に所属していました。ここでいう「言語」というのは人の作った形式言語、少し乱暴な言い方をすればプログラミング言語ということになります。これをお読みの皆さんの中にも Java や C、Ruby、Python などのプログラミング言語を使って情報システム開発などの仕事をされている方がいらっしゃると思います。このような、よく使われているプログラミング言語の他にも無数にプログラミング言語は開発されています。その理由は、「思考と表現」の関係にあります。人が何かを設計したり、それを記述したりする際に適した表現とは何か、ということ

です。コンピュータが実際に使われ始めて 70 年くらいしか経っていませんが、その使われ方は劇的に変化しています。それらのシステムの設計の仕方や使われ方を思考する際に、適した表現もまた変わっていくというのが自然なことなのです。思考と表現の関係が私の関心の中心的なテーマです。

学部のチャレンジ

ネットワーク情報学部ができて 20 年が経過しました。私は学部創立の 2001 年から教員となりましたので、私の教員歴がそのままネットワーク情報学部の存続年ということになります。この 20 年間でネットワーク情報学部のカリキュラムは大きく変わってきました。創立当初はネットワークシステム、コンテンツデザイン、情報ストラテジーの 3 コース制であったのが、現在はネットワークシステム、データサイエンス、コンテンツデザイン、メディアコミュニケーション、フィジカルコンピューティング、IT ビジネスの 6 プログラム制になっています。情報学の分野で次世代の人材を輩出し続けるのが本学部の使命ですから、我々は常にカリキュラムを進化させていかなければいけません。AI に関しては重要なテーマとして学部内で議論が進んでいます。2022 年度からは文部科学省の「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」を見据えての教育も始まります。学生さんたちにも大いに興味を持ってもらい、目標を持って学修にチャレンジしてもらいたいと思っています。

育友会員の皆さまへ

新型コロナウイルス感染症の流行により、支部懇談会で会員の皆さまと直接お話しすることができない状況が続いています。今年こそは流行が収まり、これまでのように直接お会いすることが実現することを望んでおります。支部懇談会の場以外でも、ぜひご意見を大学にお寄せいただきたいと思います。

私は、人は何からでも誰からでも学ぶことができると思っています。人の成長にはさまざまな者との関わり合いが重要です。家族、教員、友人、ペット（我が家には猫がいます）、地域の人たち、それら誰もが師となり得ます。育友会と専修大学は、人の教育をテーマとした大きなチームとして連携を深めていく必要があります。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。